

所 陵

ISSN-0913-1906

No. 39

関西大学博物館彙報
平成11年9月30日発行

[SENRYO・KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



金銅鈴 Gilt Bronze Bell

目 次

シトギと粉食文化	2
絵巻物と工芸	4
「富本」と「七福」	6
大和明日香村岡出水出土石造物の顛末	8
モエンジョ・ダロ遺跡収集資料等の寄贈について	10
台南の史跡	12
伝統的工芸品入門—その3—	14
博物館だより	16

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel 06-6368-1171 (直通) FAX 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/museum.htm>

シトギと粉食文化

上 井 久 義

古代社会での生活を知る素材として、銅鐸に施された絵画は興味深いものが多い。このなかでも、臼を中央に据えて二人の人物がたて杵で臼をつきあう図は稲作文化の姿を伝えるものとしてよく知られている。弥生時代のことであるから、これは粳を搗いている姿と見るのが自然な理解のされかたであろう。しかし臼を使うのは米を搗くことに限られていたとは思えないので、この絵からは様ざまな状景が考えられる。

空の臼は搗くものではない。このような禁忌を聞くことがある。空の臼を搗いても音だけにして無駄なことであるから、こんなふざけたことをさせないために云ったものかと思っていた。たまたま大阪府南部にあたる和泉山脈の集落で、葬送をすませた後に、家にたち帰った喪主が、入口のところで糞と笠をかたげた姿で、空の臼を搗く慣習のあることを聞いた。この地域では葬送の終了を告げる行為として空白を搗くのであるから、日常生活で同じ行為をすることは忌避されている。平常にはけっして聞くことのないこの音は、葬送儀礼の終了したことを集落の人たちに知らせると共に、悪霊を払いのける音でもあったようである。しかし銅鐸の絵の場合は二人の労働を描いたもののようであるから、このようには読めそうにない。

昭和30年代のはじめ頃、奄美大島の宇検村を訪れたことがある。主屋の軒先でたて杵で臼を搗く主婦の姿を見かけた。まるで室町時代の風俗画でも見る思いがした。しかし臼の中味は蘇鉄であった。奄美には、いたる所に蘇鉄が生育し、赤い実をつける。この実や幹は小片にして水に晒し、これを碎いて澱粉をとる。晒すのは有毒な成分を除くためである。飢饉に対する貯えとして蘇鉄を貯蔵し、晒し方が不十分なために命を落とす者がでることから、蘇鉄地獄という言葉もできたといわれている。しかしこの頃にはどこの家庭でも、朝食は蘇鉄の澱粉で造ったお粥と味噌汁を食べていたから、これは飢饉とは直接関係のない日常の主食として扱われていた。

奄美大島には、集落とは離れた一角に乾燥した稲穂を束ねたままで収納しておく高床の倉がある。この傍らでたて杵を搗く姿を見るのは、銅鐸の絵を思わせるものがあるが、蘇鉄では内容の違いが大きすぎるように思えた。テクダとよぶ長さ7センチほどの細い竹をワラでつなぎ、これを二つに折って手の平に納め、これで稲穂を挟んで粳をしごき落とす。昼食はさつま芋であるから、米は夕食の分だけ用意すればよいわけである。しかしたて杵で精白をする姿にはであえなかった。

各地に千本搗きと称する行事が伝えられている。大勢の人がそれぞれたて杵を持って、一つ臼の餅をこね、搗きあげる。東大寺正月堂の修正会で、頭屋で行われる千本搗きも見事なものである。一般に餅搗きは手水を適当に加えて固さを加減し、餅が杵に付いて持ち上がらないように気をくばる。したがって二人で杵を使う姿は餅搗きではなさそうである。

古代の食生活を知るうえで関根真隆著『奈良朝食生活の研究』は真に要を得た成果である。主食の項に、饅をとりあげ、集解の諸説を紹介し「新撰字鏡」には厚粥、「和名抄」では加太賀由とあることも示して、堅いカユというのは諸説一致するところであるとしている。このなかで「古記云、饅難、粥汁也、即可レ云粉水也、俗誤以饅字名為粉水也」とあるから、粉水と称したとも解される。同書では、甜・漿・粉水もとりあげ、米の調理法から考えて、コワメシ（飯）、メシ（饅）、カユ（粥）以外にはオモユぐらいしか残らないだろうとし、漿も粉水も米を材料とするのみで、しかもコミツという訓みが共通する点から、両者は同一物であったと考えられようと言われ、漿は幼児の食するオモユの類とみて誤りあるまいと結論されている。

古代における常食は、饅を用いて湯気で炊いた飯、水に米を入れて炊いた硬いカユ（現代の飯）である饅、水分の多い之留加由としての粥、オモユに相当する漿・粉水からなっていたことになる。いずれも粒食の一形態で、その違いは

水分の差だけということになる。しかし粉水とする表現から、これは粒食ではなく粉食の一形態と見るができるようである。同書でも、米粉・糯米粉・大豆粉・小麦粉をとりあげ、奈良時代にも粉食が普及していたとされている。

「延喜式大膳下」には、年料として索餅料小麦30石に次いで、粉米九斛があげられ、臼一腰と杵二板が添えられている。続いて粉米五石三斗一升とか「米粉料。米一石。得二石。」とあり、かなりの米粉を消費していたことがわかる。米を粉にするには石臼が必要であるが、これは室町時代以降に使用されるようになったのであろうから、これ以前は臼で搗いていたことになる。精白ならそれほどのこともないが、乾燥した米粒は砕きやすいと思うが、絹の篩にかけた米の粉にするには、なかなか手間のかかる作業である。従来から、粉食の位置付けが軽視されてきたように思われるのは、穀物の粉碎に要する手間の問題があったように考える。

この問題を考える際の参考となる品として、シトギをとりあげてみたい。「延喜式内膳司」の年料の項に、御飯帛被三領をはじめとする品々が記され、その中に筥甘合とある。これには注記があって、四合は餅を納め、四合は甜物を納め、四合は志登伎を納める料とされている。甜は、漿とか粉水と同じで、オモユであろうとされている。次に記されたシトギは、水に浸した米をすりつぶした品であるから、甜との違いは熱が加わっているか生かだけのことである。このことは、粉水は米粒を炊いてオモユ状にしたものではなく、シトギを炊いてつくるのではないかと考えられる。

兵庫県南部にある淡路島の北部に、ヤマドッサンとよぶ来訪神を迎える行事があった。家の主人が蓑と笠を着て、臼に入れてある水に浸した米を搗き、乳白色になった水をちらして神に手向ける。福井県の若狭地方では、水に浸した米を臼で搗き、これを固めて神に供える神の餅をつくる。このように神饌としてシトギが広い地域で用いられている。現代ではミキサーを使って生米を粉碎するところだが、臼で搗いて作る例が見られる。このことは、シトギが生米を臼で搗いて作っていたことを伝えるものと考えられる。そしてこれを乾燥させて粉米を作ったのではないかと考えられる。従来は、乾式粉碎

によって粉米を製してきたとされてきたが、臼と杵を使った湿式粉碎法がむしろ主流であったと見るができるのではないかと考えたい。銅鐸の絵は、湿式による製粉の姿と見るができる。「延喜式内膳司」の条に「造粉熟料」として、「白米四石。大角豆一石八斗。漉粉薄絹袋。水篩各二口。于粉暴布張一條。杷水甕暴布一條。舉粉暴布袋二口。」などとあって、細かい粉米が湿式粉碎によって製されていたことがわかる。そしてシトギはこの原形のような品であったと見るができる。従来から、日本の食生活を粒食としてとらえるきらいがあったが、臼による湿式粉碎法によって、比較的容易に粉体としたことになると、餅や団子や粉水など、シトギを基本とした粉食文化がより豊富に食卓を賑わわせていたと考えられる。

銅鐸に描かれた臼を搗く情景は、水に浸した米を砕いてシトギを造っているところと考えてみると、これはそのままシトギとして供物にしたであろうし、発酵させれば酒となり、固く絞ればシトギ餅、乾燥させれば粉米に、粉米に水を加えれば粉水に、これに熱を加えると甜や漿と称される食品になって、古代における粉食文化の一つの体系をつくりあげていたように思えるのである。菅江真澄は、旅先で稗薬を焼いて夜食にすすめられたというから、米以外の穀物での類型も見られたようである。



上 奄美大島大熊のノロ(巫女)とシトギ状のミキ。

右 ソテツを砕いて澱粉にする作業



絵巻物と工芸

高橋 隆博

近年、「絵を読む」ということが流行している。ここ十数年来の傾向である。文献史料だけでなく、画中資料を積極的に取り入れて、「歴史の実相」により迫ろうとするわけである。絵巻物が主として中世における寺社や公家・武家の建築から庶民の住居、調度や家具、風俗、さらには飲食器などを端的に提示してくれる恰好の素材であることにかわりはなく、それぞれの階層の生活の様相をうかがう上で、かけがえのない資料である。これまでも、鈴木敬三氏の著書『初期絵巻物の風俗史的研究』に代表されるように、おもに風俗や服飾研究の観点から行われてきたのだが、調度や器物についてはほとんど取り上げられてこなかった。ここでは、『酒飯論絵詞』を通覧し、中世末期における飲食器や厨房具などの実相をうかがってみよう。

『酒飯論絵詞』の内容は、大上戸の造酒正糟屋朝臣長持、最下戸の飯室律師好飯、中下戸の中左衛門大夫中原仲成の三人が、それぞれ上戸、下戸、中戸の弁を述べる形で展開するもので、詞四段、絵四段から構成されている。この作品は、室町期における座敷飾りや服飾をさぐる上で、多くの好資料を提供してくれるばかりでなく、「酒飯論」という主題に応ずるさまざまな飲食器が描かれており、工芸史の研究にとってもみのがせない。ただ、原本の所在がわからず、これまでは、京都の三時知恩寺蔵の筆者未詳の模本(江戸期)、そして東京国立博物館蔵の土佐養信筆模本(文化七年作)と狩野雅信筆模本(明治十三年没)の存在が知られていただけであった。最も古いものは三時知恩寺本なのだが、三模本ともに、室町末期の原本に基づいて描かれたことが推測されてきた。ところが近年、これの原本が見い出され、はからずもそれに接する機会があった。ここに、『酒飯論絵詞』を取り上げた最も大きな理由である。

なお、詞書については、『群書類従』に「酒食論」として採録されており、その末尾の注記に、「右酒食論者不知何人作也 或曰後成恩寺禅関之戯作」とあり、室町中期の公卿で、政治論『樵

談治要』の筆者として知られ、関白の地位まで昇った一条兼良ではないかとみなされている。

『酒飯論絵詞』には、食事風景が三場面と厨房の様子も描かれている。まず、食事風景からみていこう。床の間のある座敷の酒宴では、糟屋長持はじめ、烏帽子に垂直姿の三人の男性、僧侶一人、鼓と笛を手にする者三人、鼓に合わせてもろ肌脱いで掛け合いに興じる二人、あわせて十三人の宴席を描く(二段)。垂直姿の男の前には、白木の角切り折敷と白木の三宝が置かれ、それぞれに素焼きの杯がのっている。給仕役の若者の前には、黄漆の地に朱漆で文様をあらわした鉢と菜や菓子を盛る三つの小さな折櫃が置かれてある。漆器の鉢は、中国の彫漆器であろうか。折櫃は白木の薄板を折り曲げてつくり、足を打っている。酒器には、金銅製の長柄の両口銚子が使われている。床の間には三幅の絵画がかかり(室町期では、五幅か三幅が通例である)、床板には一對の元か明製の青磁花瓶が置かれており、これは薄緑の地に白線の文様が描かれており、おそらく浮き彫り文のある天竜寺青磁であろう。

飯室律師好飯が、僧侶と童と三人で飯を食べる場面では(三段)、三人の前に、大小二つの白木の三方が置かれ、上に飯椀や汁椀などがのっている。給仕役の僧が両手でさきげもつ飯の入った鉢は、蝶形をかたどった足付きの朱漆塗の鉢である。食器と鉢はすべて内外ともに朱漆塗のもので、根来塗と呼んでいる朱漆器であり、これと同じ形の朱漆器は多く現存している。

縁側には、水をはり、マクワウリを浮かべた鉢がある。外側に木目がみえているが、おそらく内側に朱漆を塗った鉢であろう。なお、三方とは、台部の三方向に刳形をあげたところからついた名称で、四方とともに衝重の一種である。座敷の続きの間では、茶釜が風炉にかかり、傍らには朱漆塗天目台がある。台にのる茶碗は、天目茶碗が通常なのだが、ここでは白磁か青白磁の茶碗のようである。



『酒飯論絵詞』

中原仲成が、二幅の絵の掛かる床の間を背に、烏帽子と垂直姿の二人の男と食事をする場面では(四段)、低い足を付ける大小二つの白木の角切膳と白木の小さな角切折敷が置かれ、その上に朱漆の飯碗と汁碗、それに陶器の小皿などがのっている。床板には一対の青磁の花瓶が置かれ、花を活けてある。この青磁器も中国製である。給仕役の女性は、金銅製の長柄の両口銚子を持ち、もう一人の男性の傍らには飯器が置かれるが、これは外側に木目をみせる轆轤挽きの鉢で、内部に朱漆を塗り、蝶形の足をつけたもので、こうした漆器も室町期に比定される漆器にしばしばみられるものである。桶造りの指樽の置かれる控えの間では、大型の三方に果物を盛る男と、鉄製銚子から金銅製の銚子に酒を移しかえている二人を描くが、金銅製銚子は柄のないもので、把手のつく形をしている。

板の間の厨房では(三段)、竈の火の様子をみる者、すり鉢を搗っている者、握り飯をつくる者、汁物の味見する者、男四人が働いている。陶製鍋や包丁、銚子などの厨房器具のほか、食べ物を盛った陶磁器や漆塗りの器物が見える。炊きあがった飯は大きな曲物の容器に入れられている。厨房には棚物があり、そこに漆器や陶磁器がのっている。漆器は、外側に木目を見せ、内部を朱漆塗りとする蝶

形の足付鉢もあるが、内側を朱漆塗りとし、外側に黒漆を塗り、さらにそこに朱漆で草花文などの文様を描いた鉢もある。また、総体を朱漆塗とした蝶形足付六角鉢なども置かれている。

もう一場面の厨房では、料理の出来具合をうかがいにきた者と子供に乳を含ませる女の二人の女性、俎で料理する者、鍋の味見する者などの六人の男を描く。俎に向かう男は二人で、一人は魚を、もう一人は鴨を、それぞれ手に金箸と木の葉形包丁を持ち、いままさにさばこうとしている。二人の奥に

は、七枚ほどの朱漆塗の角切り折敷があり、その上には、やはり朱漆塗りの碗と皿がのっている。水や酒などの液体の入る容器は、いずれも桶物が多い。中世でも室町初期までは、圧倒的に曲物製の器物が多く見られるのだが、桶物が目立つということは、すでにこの作品の成立する時期の室町末期頃になると、桶物が一層普及したことのなによりの証左となろう。

このように、とても文献史料だけではわからないようなことまでも、知ることができるのも絵巻物の大きな魅力である。『酒飯論絵詞』に登場する器物や道具は、現存する工芸品に照合すれば、よりヴィジュアルな生活論や工芸論に迫れようというものである。



『酒飯論絵詞』

「富本」と「七福」

汪 勃

最近、「富本銭」の出土が話題になっているが、この銭面に鑄造された「富本」という文字の意義は何であろうか、両側に七つの点は何を象徴しているのかを、少し検討したいと思う。

この「本」という字は、農業のことを指し、「食」のことである。『荀子・天論』にある「強本而節用」の句について、「本、謂農桑」、『後漢書・章帝本紀』に記載された「惟先帝憂人之本」に「本、謂稼穡」、『後漢書・班固列伝』中の「棄末而反本」に「本、農也」など、それぞれ類似する注釈がある。「本」は「末」と対照する。「末」は商業のことである。

「富本」の意義は「富民（国）強本」、「富国（民）在于務本」である。「富本」と関係のある記事は、『漢書・食貨志』に、「食足貨通、然後国実民富、而教化也」、「今殴民而帰之農、皆著於本…可以为富安天下」、「民兪勤農…則民大富也」などと、多くの記載がみられる。これらの記事から見ると、「富民」の「本」は農業であるという、その時代の思想が明らかである。「富国、富民の本が貨幣である」との解説とは全く相違する。貨幣の上に「富本」という文字を鑄造したのは、「著于本…為富安天下」（『漢書』、以下特記のないものに関してはすべて漢書からの引用である）の意味を含んで、「富」を追求したければ、「本」を大事にすることを忘れてはいけないとの寓意ではないだろうか。

「富民之本」という句は、中国の史書に記載されている。『漢書・食貨志』に、「（馬援）上書曰、富民之本、在于食貨…」という記載がある。また、『魏書・帝紀第七上』に、「（高祖孝文帝）詔曰…勸課農桑、興富民之本」とある。他にも二箇所、馬援という人物の話を用いたものがある。中国の史書にある「食貨志」などからみると、「富本」は両漢時代で最も重視されていたことがわかる。

七世紀末以前に鑄造されたとされる「富本銭」の年代は、上の記事の時代より遅い。「富本銭」の重量、法量は、唐代の「開元通宝」に同じであるが、なぜ前漢の「富本」思想を入れ込

んだのか。確かに、中国漢代の思想文化は初期日本国家の成立に多大な影響を与えたが、何故この時期において、前漢の「富本」思想が必要であったのか。この時期の日本国内にも、前漢早中期に類似するようなことが起こっていたからであろう。

前漢文帝と景帝の時期に起きた重大事件が二つあった。一つは、中央政権下にある各王国は、自ら官吏を任命し、中央政府の命令を無視した上、自国の貨幣を製造していたため、中央政府が権力を集中できず、さらに、皇族の間の権力闘争が激しくなっていて、「七国之乱」が起り、国内に戦争が長期間続いた。もう一つは、前漢の「文景之制」に入ってから、「食」生活は前代より豊かになったとともに、農事をする人の多くは商業に熱を入れるようになり、「貨」を追求することに転身した。よって、農業人口は少なくなり、「捨本趨末」という一つの深刻な社会問題となった。これは、農業生産を根本として存在した古代国家にとっては非常に深刻で、解決困難な問題である。「欲国富法立、不可得也。方今之務、莫若使民務農而已」、このような状況に対して、前漢王朝は「重農輕商」の政策をとり、「求末」の農業人口に厳しい処罰を課す法令を出して、「勸農棄商」を行ったが、「務本」には至らなかった。

前漢王朝は叛乱を平定した後、各王国の力を弱め、中央に権力を集中させ、国家を安定・富強させるために、様々な政策を実行した。

漢の文帝の十三年六月に、「詔曰：農、天下之本、務莫大焉…」とし、賈誼は「重本排末」を主題として、「是故明君貴五穀而賤金玉」を進言し、文帝はそれを採納した。

「貨」の使用を制御できれば、「七福」を招くことができる。「富本銭」の両側に点が各七個表わされている。これについても、『漢書・食貨志』の中に関連記事がある。

孝文帝五年、為錢益多而輕、乃更鑄四銖錢、其紋為半兩。除盜鑄錢令、使民放鑄。

賈誼諫曰：法使下天_レ公得_レ顧_レ租_レ鑄_レ銅錫_レ為_レ錢_レ、敢_レ難_レ以_レ鉛鐵_レ。為_レ它_レ巧_レ者其罪_レ。然_レ鑄_レ錢_レ之情、非_レ二_レ殺_レ難_レ為_レ巧_レ、則不_レ可_レ得_レ贏_レ。而_レ殺_レ之甚微、為_レ利甚厚。…今農事棄捐、而采_レ銅者日蕃、釋_レ其耒耨_レ治_レ鎔炒炭_レ、姦_レ錢日多、五穀不_レ為_レ多。善人述而為_レ姦_レ邪_レ、愿_レ民陷之_レ而刑戮_レ。刑戮將_レ甚不_レ詳。奈何而忽_レ。国知_レ患_レ此、吏議必曰_レ禁_レ之。禁_レ之不_レ得_レ其術_レ、其傷必大。令_レ禁_レ鑄_レ錢_レ、則錢必重、重則其利深。盜_レ鑄_レ如雲而起、棄市之罪、又不_レ足_レ以_レ禁_レ矣。姦不_レ勝數、而法禁數潰、銅使_レ之然_レ也。故銅布_レ于天下_レ、其為_レ禍博矣。今博禍可_レ除、而七福可_レ致也。何謂_レ七福_レ、上_レ收_レ銅勿_レ令_レ布、則民不_レ鑄_レ錢、黔_レ不_レ積_レ一矣。偽錢不_レ蕃、民不_レ相疑_レ、二矣。采_レ銅鑄作者、反_レ於耕田_レ、三矣。銅畢_レ歸_レ於上_レ、上_レ挾_レ銅積_レ以御_レ輕重_レ、錢輕則以_レ術斂_レ之、重則以_レ術散_レ之、貨物必平、四矣。以_レ作_レ兵器_レ、以_レ假_レ貴臣_レ、多少有_レ制、用_レ別_レ貴賤_レ、五矣。以_レ臨_レ萬貨_レ、以_レ調_レ盈虛_レ、以_レ收_レ奇羨_レ、則官富實而未民困、六矣。制_レ吾棄財_レ、以_レ與_レ匈奴_レ、逐_レ爭其民_レ、則敵必壞、七矣。故善_レ為_レ天下_レ者、因_レ禍而為_レ福、轉_レ敗而為_レ功。今久退_レ七福_レ而行_レ博禍_レ、臣誠傷_レ之。

この「諫」が、実は統一貨幣を鑄造するという献策である。賈誼は、国家を安定させるには、「富本」と統一貨幣、すなわち「食」と「貨」との両者が緊密に関係しているとし、「七福」すなわち「黔罪不積、民不相疑、耕者反於田、貨物平、貴賤別、官富實而未民困、爭民壞敵」の追求の重要性を認識していた。しかし、この献策は文帝に採用されなかった。文帝の末には、「半兩盛、錢輕」、「棄農經商」の社会問題は更に深刻化し、景帝の三年春正月、「詔曰：農、天下之本也。黃金珠玉、饑不可食、寒不可衣、以為幣用、不識其始終。…其令郡國務勸農桑、益種樹、可得衣食物。吏初民若取庸采黃金珠玉者、坐臧為盜。」と、厳しい法令が出された。

武帝の元狩六年、更に「日有司以幣輕多奸、農傷而未衆、又禁兼併之涂、故改幣以約之…」と詔書を下した。この詔書の内容について、「更去半兩錢、行五銖錢、皮幣、以檢約奸邪」と李奇は注を加え、「末謂工商業」と顔師古は注釈した。このように中央政府の管理下にない貨幣が鑄造されることは、中央集権を推進するにあた

っては、あつてはならないことであるため、「盜鑄金」（貨幣を勝手に鑄造）で、数十万人が処刑され、罪に問われた人数は百数十万人に至った（范文瀾『中国通史』）。このような時代背景に基づき、馬援という人物は、国家を安定させるには貨幣を統一する必要があると、再び認識したので、「改鑄五銖錢」を献策したのである。漢の武帝はこの策を採用し、漢王朝は次第に最盛期に入った。

「富本」と「七福」は漢代の文学者、政論家である賈誼という人物の治国思想を反映している。馬援はその統一貨幣を「五銖錢」として具体化した。「富本錢」の上の七つの点には、「王者之道」などの古代の国家を治める觀念が含まれ、「七福」のことを表していると思う。このように理解すると、「富本」と「七福」とが密接に関係し、古代の農業国家における「食」と「貨」の意義も明らかになる。統一国家を治めるためには、「富民之本、在于食貨」、すなわち「富本」と統一貨幣が、国家にとっての重要事項であるとの認識から、よく見える所である貨幣の上に「富本」と「七福」を鑄造して、忘れさせないように、時に之を省みさせることを目的として意匠したのではなからうか。

また、『日本考』（[明]李言恭・郝傑撰、汪向榮・嚴大中校）に、「倭不自鑄、但用中国古錢而已…惟不用永樂、開元二種。」との記載がある。永樂錢は安定した通貨ではなかったため使用されなかったと推測できるが、「開元通宝」が日本で一通貨として用いられなかったのは、日本国内には「開元通宝」とほぼ同型式の「富本錢」があったからではないか。ただし、これによって、「富本錢」が実際に通貨として流通していたという証拠にはならないのであるが。

「富本錢」について、もう二つの謎があると私は思う。一つは、今まで検出された富本錢は、すべて溝から出土したことである。さらに、鑄造精緻の完全な形態を持つ「富本錢」の縁に何故鑄張りが残されたかである。この二つの問題が解決できれば、「富本錢」が通貨とされていたかどうかは、その謎が解けるかもしれない。



奈良県 飛鳥池遺跡 富本錢

大和明日香村岡出水出土石造物の顛末

網 干 善 教

奈良県高市郡明日香村岡字出水の地籍で発掘調査を担当する奈良県立橿原考古学研究所は、検出した遺構が飛鳥時代に築造された苑池遺構であると発表し、平成11年6月15日付の新聞はその内容を大々的に報道した。

この遺跡はかつて「出水の酒船石」と称された石造物が出土したところであるが、その石造物が現在、京都市左京区南禅寺下原町37、野村別邸碧雲荘（野村殖産株式会社）が保有し、庭石として転用されていることは周知のことである。そこでこれを機会にその石造物の顛末について整理しておきたい。

まず、平成4年11月1日刊行の野村小枝著『野村得庵と碧雲荘』（野村碧雲会発行）があつてそのなかに次のような記述がある。

又織庵露地の降り躊躇の寛として使われている石造物に出合ったときだ。これが飛鳥で出土した酒船石なのである。

とあり、ついで現在、岡字酒船1266番地に所在する史跡酒船石について本居宣長の『菅笠日記』を引用して説明している。そして

ところが、大正5年5月21日、酒船石から西南約400米余の飛鳥川畔の水田から、酒船石と非常によく似た石造物が2個出土した。水田の所有者が水路に石が出ているのを見つけて取り除こうとしたところ、これがずいぶん大きな石で、掘り進むうちに人工の石造物らしいと判った。

半月がかりで掘り出した石の1つは、長さ2.2米、幅1.7米、高さ75厘の扁平な石で、表面に扇状の窪みが2段に彫ってあった。この石には台石がついていたが、それは埋戻したようだ。（中略）

今こうした石造物が掘り出されたら大変な話題になるだろうし、埋蔵文化財として個人の自由にはならないが、当時はそうした点が野放しだった。2個の新酒船石は水田の持主から庭師の手に渡って、碧雲荘へ運び込まれたのだった。大正・昭和初期の実業家たちは、庭園内に古い石造美術品を据えることを好ん

だ。従って庭師たちは、絶えずそうした品の入手に気を配っていた。（そして、神戸市灘区に本邸棲宣荘を新築した際、明治20年代に流出した法隆寺若草伽藍跡の塔心礎が移ってきた時の様子、昭和14年10月末にこの心礎を無償で法隆寺へ返還し、それが法隆寺再建非再建論争に一石を投じた経緯を記している）と述べている。ところがこの庭石について

新酒船石が又織庵の路地の寛に使われているのを見た高橋箒庵は「趣向は左る事ながら当荘の如き規模雄大なる茶席の路地に、斯かる佻奇なる細工が調和すべきや、茶人の批評は如何あらう」と否定的な感想を洩らしている。出土したあとの保管がどのようにされていたかは判らないが、大正12年に据えられた当初はかなり目立って、違和感があつたかもしれない。箒庵も石造物趣味では人後に落ちない人で、こまめに古寺や庭師を廻って目ばしい品を漁っていた。箒庵の口調には、いささかの口惜しさが籠っているかのようである。としている。この文を読むと大正12年には出水



京都碧雲荘にある出水出土の石造物

の石造物が碧雲荘の庭園に配されていたことが分かる。ただ大正5年の発掘から12年までの間の様子は分からないが、この記述に間違いがなければ、佐藤小吉編の『飛鳥誌』（昭和19年5月5日、天理時報社発行）に発見の年月が大正15年5月とあるのはミスプリントとなるだろう。なお、昭和3年11月10日の昭和天皇即位の大礼にあたって碧雲荘は久邇宮邦彦王夫妻の宿舎に当てられて、大改修工事を行っている。

つぎに、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館が開催した昭和61年度秋期特別展示の図録『飛鳥の石造物』には、

飛鳥川から張り出した北寄り、出水字ケチングの田圃から、耕作中、大正5年、石塊が現れた。掘出すと2個の花崗岩よりなる、もう一つの酒船石があった。発見地の隣の字アグイで組立てられた写真が残っている。

とある。そこに掲載された2葉の写真は発見直後の大正5年6月に和田千吉編によって刊行された『日本遺跡遺物図譜』第3輯の4枚のうちの2枚である。

また平成2年10月3日～11月23日の間、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館で開催された『日本書紀を掘る』と題する開館15周年記念特別展示の図録に、

1919年（大正7年）（~~1919~~1919年は大正8年）飛鳥川の洪水によって、雷丘と甘樫丘の間にある豊浦の集落は大水の被害をこうむる。この時、上流のミロク石の近く、木葉堰東岸、字ケチングの川岸が洗われ、2個の奇石が出土する。出水の酒船石である。隣の字アグイの田圃で組合わされた後、牛に引かれた石は畝傍駅より、京都東山へ運ばれて行った。

偶然出土の時代である。

と記している。ここでは大正7年の水害によってこの石造物が出土したとの見解であるが、明日香村によると、地元で俗に「豊浦流れ」という水害は大正6年8月15日の夜半から翌16日の早朝にかけて起き、家屋18軒が流失したといわれているから石造物はこの水害でなく、前年の大正5年すでに出土していたことになる。

昭和2年12月10日内務省蔵版、『奈良県における指定史蹟第一冊』の報告書には、大正5年5月に偶然発見した。附近には竹片、土器片、木実、杵等も出土したと記している。

さらに、先述の『日本遺跡遺物図譜』の4枚の写真の解説文には次の如き説明がある。

（其一、其二、）此地の所有者西田新太郎氏は、大正5年5月21日右水田の水路に石の一部分を発見し、之を取除かんとして、はからず一種の石造物なるを発見し、続いて之を発掘し、6月5日に至り発掘し終りて、十間計り距りたる飛鳥川の堤防の凹所へ移したり。とある。その場所について、

此石造物の後面に標を付するは発掘場所にして、現在の石のある所より約十間計り東南の田の中に当る。

そして写真について、

写真は森田常次郎氏監督の下に6月11日撮影したるものにして、以上はすべて発掘調査したる同氏に據れり。

とある。森田常次郎氏は橿原市久米町に在住されていた古物商で、戦前かなりの考古資料のコレクションがあった。

次に其三、其四の説明について、

此石に割れ目あるは運搬の際破損せしものなり。森田常次郎氏は原位置に於て試に水を流し見たりしに、甲乙の組合せよろしきため、一滴も外部へ洩れざれしのみならず、上の甲石より乙石へ移りて、長き溝に流れ入りてより、其深きところにて一時沈澱し、徐々に下に向て流れるる様は甚巧にして、終りの穴は少しく上向き居り、何物か此先に付着なさしむが如き装置なり。石の傍よりは土器片、直径1寸の竹切れ、木の実、稻のもみ、直径約五寸位の丸木を発見したるも、関係あるや否やは明らかならず。

とする。

以上の諸記録から出水の石造物の検出、京都への搬出の様子の一部をうかがい知ることができるが、まだ十分であるとはいえない。

今回の出水の苑池遺構発掘にかかわる報道によると、この苑池が新羅の雁鴨池と関係があるとか、『天武紀』にみえる「白錦後苑」でなかろうかとかの論議はあるが、それは別として、以前この地より出土した石造遺物の顛末について記しておきたい。

モエンジョ・ダロ遺跡収集資料等の寄贈について

このたび御縁あって、モエンジョ・ダロ遺跡収集資料等5種9点を関西大学博物館へ寄贈させて頂くことになった。昭和52年12月27日～52年1月8日 パキスタン・アフガニスタン訪問の機に恵まれた。パキスタンではガンダーラ・ペシャーワル・カラチおよびインダス文明の著名な遺跡であるモエンジョ・ダロ遺跡（死者の丘の意）を訪ねた。寄贈資料はいずれも現地で蒐集したものである。

紀元前2500年頃よりインダス河流域に栄えたインダス文明は都市文明の性格が強い。後のインド文明の源流の一つとも理解される文化要素が存在し*、また海路による交易によってメソポタミア文明とも繋りをもつ。街路整然たるモエンジョ・ダロ遺跡を訪ね、悠久の往古の都市跡に立って感銘深いものがあった。インダス文明の衰退については、人為的な要因や自然環境の変化にその原因を求める見解が多く提出されているが、研究者間で衰退要因についての一致はいまだみえていない。

今回寄贈する資料の内訳は、有銘印章1点、コブウシ形土偶1点、人物土偶1点、土器片1点、インダス印章シーリングの複製5点の、計

下 間 頼 一（関西大学名誉教授）

9点である。インダス印章シーリングの複製品をカラチ国立博物館にて購入した以外は、いずれもモエンジョ・ダロ遺跡において収集・購入したものである。

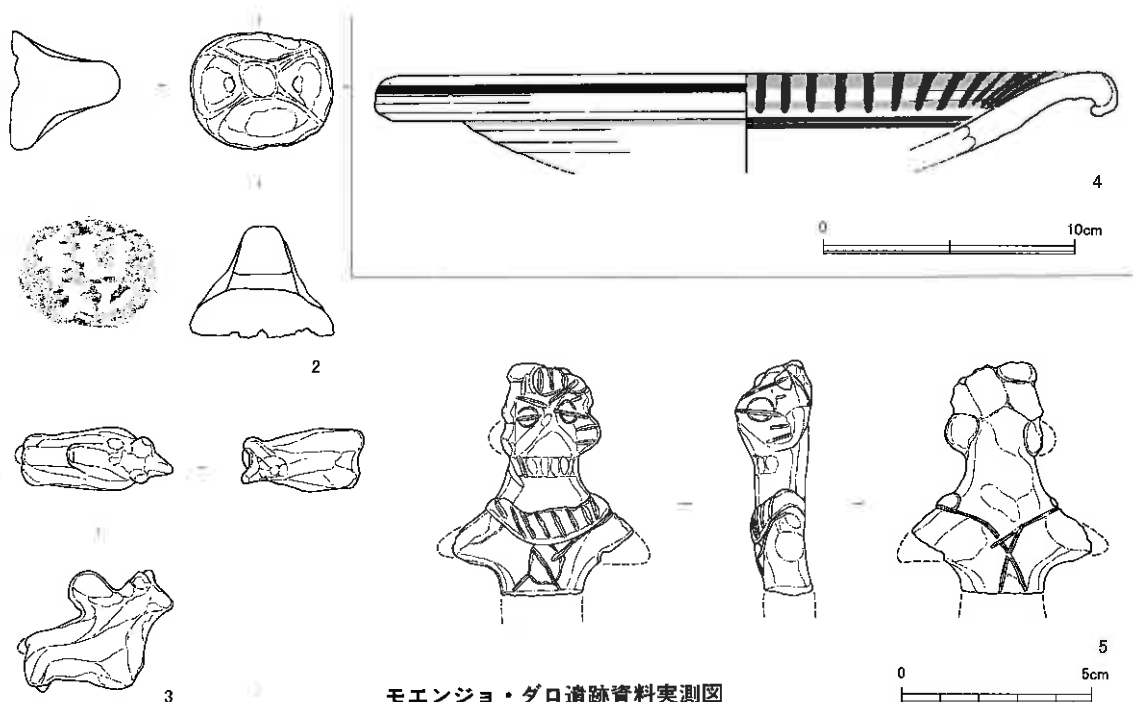
些少な資料であるが、本遺品が南アジア考古学への理解の一助となれば望外の幸せである。ただし、購入品、採集品ともに、本来の脈絡から遊離したものであり、層位・型式ともにインダス文明期のものとは断定し得ない。なお、遺物実測・写真撮影と観察は、上杉彰紀（関西大学大学院）が行なった。

インダス印章シーリング複製品

カラチ国立博物館に収蔵されている凍石製方形印章のシーリング複製品である。石膏に陰刻の印章原体を押し付け、文様を陽刻状に図像・文字を押し出す。コブウシ・無コブのウシ・サイ・ゾウなどの動物や神像などの図像とインダス文字を刻み、いずれもインダス印章としては典型的な例である。インダス文字の解読はいまだなされていないが、インダス文明期における都市社会の構造を知る上で大きな意義をもつものである。



写真1



モエンジョ・ダロ遺跡資料実測図

有銘印章

土製で、灰色から灰褐色を呈し、硬く焼きしめる。水平方向に紐孔をもつつまみがついており、紐を通して懸垂することを意図したものと考えられる。つまみは四方向から指オサエによって緩やかにぼみがつくられている。銘文面は楕円形を呈し、平坦面を構成する。4個の文字を2文字2段にへら状工具によって刻む。長径3.7cm、短径3.05cm、高さ3.0cmを測る。

コブウシ形土偶

脚部・尾を部分的に欠損するが、全形がわかる例である。全長4.0cm 最大幅1.65cm 高さ3.2cmを測る。明橙色で赤褐色スリップを施し、胎土は密・精良、シャモット微粒を多少含む。

土器片

高杯の口縁部である。淡橙色から明橙色を呈する表面上に赤橙色スリップを内外両面に施し、さらにその上から黒色・赤色彩文を描く。体部には内外にロクロ使用によるナデ痕が観察でき、口縁部まで成形したのちに、粘土紐を擬口縁端部外面に貼り付け、下方に巻く口縁端部形態をつくっている。彩文は体部外面および口縁部外面に各1条、体部内面に4条の横位帯状文を彩文し、口縁部から体部内面にかけて1.0cm間隔ごとに並ぶ縦位の平行線文をあらわす。口径27.6cm、遺存高3.3cmを測る。胎土は密、白雲母微粒・

穀物粒微粒を多少含む。

人物土偶

上半身が遺存し、遺存高6.2cm、遺存幅4.7cm（両腕間）、厚さ1.4cm（首部）を測る。全体的に扁平な板状の胴部に、四角錐状に中央が隆起する顔を伴う頭部をもつ。粘土塊貼付・刻線によって頭飾もしくは頭髮、首飾2種をあらわし、胸中央に円形粘土板を貼り付け、×状刻線を施す。背面にも肩から背中中央にかけて3本の刻線を×状に施す。そのうち首の位置に表現されていた首飾をあらわす粘土紐は右端一部を除いて剝離・欠失している。上述のように、背面には刻線を施すが、装身具等の細部表現はない。色調は赤褐色から淡橙褐色を呈し、スリップは施さない。胎土は密で、白雲母微粒を多少含む。焼成は良好、硬く焼き締まる。本例は、モエンジョ・ダロ遺跡における現地住民からの購入品であるが、この土偶形式はインダス文明期のものではなく、前2～1世紀ごろのガンダーラ地方からタキシラー地方に特徴的なものである。シンド地方での報告例はなく、北西インドにおいて採集され、古物売買によって遠くモエンジョ・ダロ遺跡の売人の手にもたらされたと考えられる。

* 辛島 昇・桑山正進・小西正捷・山崎元一 1980『インダス文明 インド文明の源流をなすもの』日本放送出版協会、東京

台南の史跡

松 浦 章

I

台湾の南に位置する台南は台湾で最初に開かれた地の一つである。台湾が開かれたのは16世紀頃からで、オランダ勢力が最初の開発に関与し、その後鄭成功勢力が1661年に大陸から来てオランダ勢力を駆逐して、台湾支配を確立していった。その後、鄭成功の子供の鄭経、孫の鄭克塽と続くが、1683年には鄭氏の支配に替わって清朝の支配が行われ、台湾の開発は徐々に北部へと展開していった。その意味で台南は最も古い史跡が多く残る地である。

II

日本から台湾への国際線がある台北から台南へは飛行機で45分ほど、高雄からは車で30分ほどの地にあり、交通至便の地である。市内の中心部には赤崁楼・武廟・大天后宮・孔子廟・明延平郡王廟・大南門城門跡・南門碑林などがある。いずれの史跡にも碑文が現地でそのまま保存されている。碑文は当然と言えば当然であるが明末から清代のものが多い。

赤崁楼(写真1)は中区民族路二段212号にあり、1653年に漢人郭懷一等による抗租一揆による暴動によってオランダが堡壘を築き1655年に完成したとされる Province 城である。オランダはここに第7番目の省の意味で province (省) としたとされ、それが固有の名称になっ

たが、台湾では「赤崁楼」、「紅毛楼」などの呼称で呼ばれていた。鄭成功が1661年に台湾に来て、オランダ勢力を駆逐するところが鄭成功政權の中心地となり「承天府」としている。しかし息子の鄭経の代には堅固な構造として火薬の保管庫とされた。現在は整備され、鄭成功を囲む立像などが配置され、台南観光のメッカの一つと言える。

台南大天后宮(写真2)は別名、台南媽祖廟ともいわれる。媽祖廟は台湾全島だけで330余あるといわれるが、この台南大天后宮は1664年(永曆18年)に建立され、台湾では最古で最大の廟の一とされる。場所は中区永福路227巷18号で、赤崁楼の南側にある。台湾の媽祖廟は一般に歴史的建造物であると同時に、現在も多く信者がお参りする寺院でもある。保存も創建当時の色彩をそのまま維持されていると思われる程きらびやかで、歴史の古さを感じさせない。

明延平郡王廟は中区開山路152号にあり、台湾を開いた鄭成功を祀る祠廟である。現在の祠廟は光緒元年(1875)に福船政大臣沈葆楨により



写真1 赤崁楼



写真2 台南大天后宮



写真3 鄭成功の座像



写真4 南門碑林

竣工した福建式の建造物である。正殿には鄭成功の座像(写真3)が安置されている。

大南門城門跡は中区南門路34巷邊にあり、清代台湾府城の歴史を知る重要な史跡として保存されている。同地は現在南門公園となっていて、さらに南門碑林(写真4)として、清代の碑文約50基を集め保存されている。

III

中心部から車で20分ほどの所に安平天后宮、安平古堡、徳記洋行、延平街(台灣街)がある。特に安平区国勝路82号にある安平古堡は、オランダが1623、1624年に現地に進駐し1634年に城塞を築城している。1623年は明の天啓3年であり、明実録『熹宗実録』巻33、天啓3年4月壬戌(3日)の条には「紅毛夷は西南オランダ国であり、従来は中国と関係が無く、ただ福建商人がパタニやジャワに貿易に行きそれらの地で取り引きしていた。萬曆甲辰(32年、1604年)



写真5 安平古堡の旧城壁

に奸民潘秀がパタニ国に行き、彼等を導いて以来、澎湖島に來航して貿易を求めたが、中国はゆるさなかった。」と記しているように、オランダは大陸に拠点を求めていたが、実現できず、明朝の統治の及んでいない台湾に拠点を築いたのである。その最初が安平城塞であった。安平城塞は日本ではゼーランディア城として知られる。同地はオランダにとって台湾統治の拠点でもあった。現在は修復されているが、創建当時の城塞の堅固さを知る城壁の一部(写真5)が今なお知られる。繁栄の中心地は台南駅周辺に移っているため安平地区は比較的ひっそりとした環境である。

IV

台湾に関する歴史文献の記述の多くは17世紀以降からと言われるが、その記録に関する多くの史跡が現在もなお保存されている地が台南である。比較的近距离の範囲内に多くの史跡を保存しており、台北からは重点観光で有れば日帰りも可能であるが、現在も活気のある夜店、たとえば小北夜市などがあって見るべきところが多い地である。

【参考文献】

台南市政府『府城故事—台南市古籍巡礼—』1999年3月。范勝雄『府城叢談—府城文獻研究6』台南市政府、1999年4月。「明朝寧靖王府 祀典台南大天后宮」台南大天后宮管理委員会印製。

伝統的工芸品入門—その3—

角 田 芳 昭

伝統的工芸品のうち通商産業大臣の指定する伝統工芸品は平成8年11月現在187品目を数えている。そのうち「漆器」関係で指定されているものは次の17品目である。木曾漆器、津軽塗、輪島塗、越前漆器、山中漆器、高岡漆器、香川漆器、京漆器、川連漆器、若狭塗、紀州漆器、金沢漆器、小田原漆器、秀衡塗、琉球漆器、大内塗、鳴子漆器（指定順）

そこで今回は第2次（昭和50年5月10日付）で指定された「輪島塗」について書いてみたい。

「輪島塗」の起源は室町時代初期の応永年間（1394～1428）が定説とされており、紀州根来寺の僧が輪島に移動し、寺用の什器に漆を使用、製造したのが始まりといわれている。その後江戸初期寛文年間（1661～1673）に地の粉（珪藻土の焼成粉末）、下地法を完成し、堅くてじょうぶな漆器が作り出され、輪島港を中心とする流通機構を活用し、各国の顧客の注文による生産、また自信作のサンプルを携えて全国を旅する塗師たちの自作自売がその産業の基礎を築いた。その後沈金の創始、蒔絵技法などもとり入れられ豪華さ・華麗さが加わり、料理屋・旅館などでも使用されるようになり、高級性、稀少価値性、本物指向として販路を広げ、漆器の輪島として全国に著名になっている。

輪島塗パンフレットによると1994年4月現在807軒、2,595人が漆器事業に従事されている。伝統工芸士32名（昭和58年現在）も認定されている。また過去より現在までの輪島塗製品3,804点が「国指定重要有形民俗文化財」に指定されている。

輪島塗の著名大家として「前大峰」「竹園自耕」の両氏が活躍されており、昭和4年帝展に初出品し、初入選され、以来諸々の秀作が遺っている。

昭和13年（1938）戦時下、金の使用制限の為漆器業界が大恐慌となり、停滞する。前大峰氏は日展審査員、重要無形文化財漆芸技術保持者、日本伝統工芸審査員、名誉市民などに推されたが昭和52年死去される。これ以前の昭和42年蒔絵界の長老竹園自耕氏が76歳にて死去されてい

る。この二人に続く作家として角野岩次、柿本章、西塚朝光、桜井一良氏らが活躍されている。地元においては輪島漆器会館、石川県輪島漆芸美術館が建設され、展示及び制作実演が行なわれている。また後継者育成の為、各種の育成機関があり、石川県立輪島実業高等学校にインテリア科が設けられ、技術者の養成を行なっている。輪島漆器共同高等職業訓練校では実際の輪島塗の仕事を通じての技術教育が行なわれている。また石川県立輪島漆芸技術研究所では「芸は人なり」を基調に、高度の伝統技術の習得者を養成するため、各界の第一人者を講師に招き充実した研究、実習が行なわれ、卒業生から多くの有能な作家が輩出し、漆芸界をになっている。

輪島には他にもう一つの文化財が残っている。京の町家にも匹敵する塗師文化の粋、漆の町家「塗師の家」である。輪島屋善仁、輪島町家「塗



人間国宝 前大峰氏

師の家」の解説パンフレットに次の如く記されている。

「この建物は塗師文化が構築された明治の建築です。今なお日本の町家の原形をとどめています。町家の大きな特長である通り庭を中心に居住空間を前に作業場を後に、いわば“人前職後”の配置構造は輪島町家「塗師の家」独特のもので、外観は通り面に対して切妻に平入りの店屋の部分を付け、その店屋の下屋は妻より長く伸び一見して平屋風に見せ、狭い間口と合わせ外観は質素を旨とした藩政時代の町家の面影を残しています。内部は一転して、総漆拭いがなされ、数奇屋風のシンプルな造りが町家の粹を感じさせ、日本で最も美しい町家の一つです。独特の間口に続く通り庭に沿って居住部分があり、奥に家伝の塗り技を秘するが如く配置された下地場、塗師蔵等があり、通り庭と共に長廊下によって結ばれています。町家には堺衆が作り出した「茶の湯」の場としての雰囲気を受け継いでいるものがあります。この塗師の家は草庵の茶の湯に似せた「市中の隠」と呼ぶにふさわしい佇まいを見せています」とあり、この塗師の家を改修したのが輪島屋本店社長中室勝郎氏である。「輪島屋本店」は輪島屋善仁によって文久年間に創業され、以来輪島塗史上において最高の製品を世に送りその真価を100年、200年後に世に問うことを理念とし精進を続けており輪島塗製造業の屈指の規模を誇っている。その代表者として、また数奇屋者としても著名で『漆の里・輪島』（平凡社、平成9年）などのエ



石川県輪島漆芸美術館

ッセイ集も出されている。本学でも博物館設立を機に記念となる資料をと考え、輪島漆器「屠蘇器」を購入させていただいた。（解説本誌34号、平成9年3月号）その折この「塗師の家」を見学させていただき感動を覚えた。今もその時の情景が目にかぶ。筆者も京の町家といわれるところに住んでいたので諸々対比でき興味がわいた。内部は漆がふんだんに使用されており、「漆の町家」である。特に「桝棚の間」は朱色で照明により漆の艶が一段と映え、幽玄の美をかもし出していた。見学の機会があればぜひ見学しておくといい。「日本の文化遺産」ともいうべきものである。

最後に輪島塗の参考文献として昭和58年11月京都書院から発行された豪華本『輪島塗』を紹介しておく、変形B4判622ページで、写真図版711点、本文解説34ページ、資料124ページ。980部限定出版である。監修荒川浩和氏である。前述の前大峰氏、竹園自耕氏、黒田静璋氏、天野文堂氏らの作品が多数収録されており、また、輪島漆芸技術研究所卒業制作の作品44点が収録されている。



漆の町家「塗師の家」（輪島屋善仁）幕末～明治建築・平成2年改修

博物館だより

◇博物館のインターネットホームページを開設しました。

ホームページアドレスは、<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/museum.htm> です。

関西大学博物館のメールアドレスは、hakubutsukan@jm.kansai-u.ac.jp です。

◇平成11年度博物館企画展「山村の豪農―園田家の世界―」を4月5日から5月15日まで開催し、4月4日と5月16日の特別開館日を合わせると1827名の入館者がありました。また、平成11年度関西大学博物館講座を企画展開催に合わせて4月10日に開催し、約200名の聴講者がありました。

講師・演題は下記です。

関西大学名誉教授 有坂隆道「高橋至時と伊能忠敬」

関西大学大学院生 常松隆嗣「園田家と園田多祐」



博物館講座風景

◇平成11年度開催の考古学入門講座の詳細は下記の通りです。

	月 日	講 演 題 目	講 師
第1講	10月23日(土)	食 事 と 食 器 の 変 遷	網干善教 関西大学名誉教授 飛鳥文化研究所長
第2講	10月30日(土)	日 本 古 代 の 食 生 活	藺田香融 関西大学名誉教授
第3講	11月6日(土)	人 と 類 人 猿 を 分 け た 食	山口卓也 関西大学博物館学芸員
第4講	11月13日(土)	縄文時代から古墳時代の食生活	米田文孝 関西大学助教授
第5講	11月20日(土)	歴 史 時 代 の 食 生 活	十河良和 日本考古学協会会員
第6講	11月27日(土)	食 べ る と い う こ と の 意 味	上井久義 関西大学博物館館長 関西大学教授

会場：関西大学天六キャンパス（大阪市北区長柄西1-3-22）309号教室

時間は午後2時～午後4時 ただし初回は午後1時半から開講式。

問い合わせは、関西大学事業局事業課（電話06-6368-0297）へ

編集後記

『阡陵』第39号をお届けします。今号は、上井久義館長、高橋隆博教授、松浦章教授に執筆を頂きました。網干善教名誉教授・大学院生の汪勃氏には、飛鳥の注目された発掘成果に関連した原稿をいただきました。また本文にありますように、下間頼一名誉教授よりモエンジョ・ダロ関連資料4点とインダス印章シーリング5点をご寄贈いただきました。

厚く御礼申し上げます。

博物館のホームページは、今後充実させていきたいと思います。博物館行事のご案内も設置していますので、ご利用ください。

表紙写真は、「金銅鈴」です。本山資料で、他に鞍金具と轡とともに一括資料とみられ、群馬県藤岡市付近の古墳出土と伝えられます。

関西大学博物館彙報 No.39 平成11年9月30日 発行

関西大学博物館 編集

ナニワ印刷(株) 印刷